

---

# スターシップ オペレーション

よるきつね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スターシップ オペレーション

### 【Nコード】

N2783J

### 【作者名】

よるきつね

### 【あらすじ】

増えた人類が宇宙へと進出し、第4次宇宙大戦が起こった後の時代。いまだ人々がお風呂をブラシで洗っている世界観です。

「諸君！ エッチなのは……いけないことなのか！？」

コンテナの上、大きな声で人々に問いかけるのは二十代そこそこの男性だった。

宇宙戦艦ワールドビクトリー号、乗組員全員に問いかける。

その男は艦長である。

片手を大きく振り上げ、叫ぶ。

「否！ それは人として当然のことであり、抑えきれないものなのだ！ ゆえに我らはここに集い立ちあがらんとするのである！」

艦長の演説に、広い格納庫に集まった男たち全員が歓声を上げる。少年から年寄りまで、あらゆる星、あらゆる国の人種がびっしりと格納庫の中にそろっている。

彼らの思いは一つにまとまっていた。

「我々は火星条約順守の下で女の子のちよつとエッチな姿を見るために戦いを起こす！」

艦長はその長い台詞を、大声で息継ぎもせず言い放った。

演説を聞く者たちの熱はそれを受けてどんどん高まっていく。それぞれの希望が一つとなり、大きなうねりとなって宇宙を襲おうとしていた。

「作戦名は」

そして艦長は、今までで一番大きく声を張り上げる。

「スターシップ・オペレーション！！」

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

窓の外を見れば、視界の後方へと流れゆく星々。

宇宙戦艦ワールドビクトリー号の乗組員の一人であるカイは、隣に座っている顔に傷のある男に問いかけた。最新鋭宇宙戦艦の中、戦闘要員である彼は暇だったのだ。

「艦長、どうやってこの戦艦を手に入れたんだろう……」

「世界中、変態ばっかってことだろ」

「艦長、黙ってりゃ顔は悪くないのにな。なんで女の子にもてないんだろ」

「ま。あんな性格だしな」

「そりゃそうか。あとそうだ」

「んん？」

「作戦名、別に悪くないと思うけど、なんでスターシップ・オペレーションなんだ？」

「はっ、女の子を捕まえてちょっとエッチな姿を見せてもらおう大作戦……とかがよかったのか？」

「あー……悪かった。気にしないでくれ」  
「ん」

そんな話をする二人を乗せて、宇宙戦艦ワールドビクトリー号は星の海を進んでいく。

ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ

「諸君！ 我々の航宙は三週間目に入った！ しかし、残念なこと

に……可愛い女の子しか乗っていない宇宙船はなかなか見つからなかった……！」

当たり前だ。

そんな雰囲気か漂ったのは一同が疲れていたからか。

だが、しかし、船長はこれ以上ないほどの満面の笑みを浮かべて演説を続けている。さすがに不思議に思う者も出始め、戸惑いは周困へと感染していく。そして徐々にざわめきが大きくなっていく中、艦長は告げた。

「聞きたまえ、諸君！ 良い知らせだ！ 我々の、我々の求めている宇宙船が見つかったぞ！」

ざわめきが最高潮に達する。そして、ざわめきが歓声に取り変わるまでにさして時間はかからなかった。

そこらかしこから上がる各々の喜びの叫びが、宇宙戦艦ワールドビクトリー号を揺らし、宇宙へと響き渡る。

実際には、それほど大げさなものではなかったが。なにより空気がない宇宙で声が響き渡ることなど、ありえなかったが。なんにしる興奮する人々にはそんなこと関係なかった。

「私の古くからの友人で、確かな筋からの情報だ。ワグダラ星サンタラブラ国所属の輸送用宇宙船ホウセンカが我々の目標となる！ かの船には国の内部事情によって女の子しか乗っていない」

熱狂の渦の中、艦長は話を続ける。

「ホウセンカは今、母星であるワグダラへの帰路へ着いている。しかもワールドビクトリー号が現在進んでいる宙域からほど近い場所を通過しようとしているのだ」

そして、びしっと明後日の方向を指差し、乗組員を見回す。言った。

「喜びたまえ。ホウセンカと接敵する推定時刻は20分後だ」

「……………」に、20分後おおおおおおおおお  
つ!?」「……………」

乗組員全員、総勢何百名もの声が一つになった。

ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ

「なあ、うちの艦長大丈夫だと思うか？」

あちこちから聞こえてくる慌ただしい足音を聞きながら、カイは顔に傷のある男に訊ねた。

顔に傷のある男は不思議そうな顔をする。

「なにがだ？」

「なんか頼りないところがあるような……」

「ふん、心配すんな。あれでも昔はマレー海戦の魔王とか呼ばれてたらしい」

「……いや、宇宙戦艦の艦長が海戦の魔王とか呼ばれてても、まるで安心できる要素がないんだが。なんで宇宙戦じゃないんだ……。いや、そうじゃなくてさ。いきなり20分後というのはおかしいんじゃないか？」

「おかしくはないだろう。この機会を逃したらハウセンカは星に戻っちゃう」

「そんな急いでも作戦が失敗するだけじゃないのか。もつと準備を整え、またハウセンカが宇宙に飛び立った所を狙えばいい」

「そのことか……。そんなに待たされちゃ我慢できないからだろ」

「そんな、艦長つてのは冷静沈着であるべき」

「おっと、勘違いするなよ。我慢できないのは艦長じゃない。俺たちさ。これ以上成果がなければ乗組員からも離脱者が出る。艦長はその辺が分かってんだと思うぜ」

「そう、か……。最低だな、俺。上官を批判するようなこと言って」

「いや、そうでもないだろ。だって」

「……………」

眉根を寄せるカイに、顔に傷のある男は意味ありげに笑って言った。

「 本当に艦長が我慢できないだけかも、しれないしな？」

ハウセンカとの戦闘まで、後15分。

ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ

「 敵船との相対速度ははまだ0のまま一定で保っています。ワグダラまで7500」

「 くっ、敵船の加速器によって確立偏在の崩壊が始まりました！

このままでは」

「 あわてるな。STOK2番と3番を射出。40秒後にハンブリカル式減衰器を作動させる」

「 す、STOK、2番、3番射出っ」

「 艦長、独立性EMIの有効時間が5分を切りましたっ」

「 わかっている。いまだっ、減衰器を作動しろ！」

「 減衰器作動しました！ 包囲誘導によって偏在の崩壊が収束していきますー！」

「 報告っ。敵船よりBPLM！ 包囲誘導を破壊するつもりです！」

「 減衰器の出力を上げるっ。二十秒後にEMIBを射出だ。ASHを準備しておけ」

「 も、目標宇宙船から高エネルギー反応！？ そんな馬鹿なっ」

「 っ、LCM、始動しろ ー！！」

「う、うわあああああああああああああつ!?!」

一瞬、白い閃光が視界を埋めてなにも見えなくなった。それからすぐに周りの景色が戻ってくる。

カイは隣に座っている顔に傷のある男につぶやいた。

「す、すごいことになってるな」

「だなあ。星間通信を遮断して減衰器でワープを封じた後、銃をさして動きを止めるだけのはずだったんだが。だいたい、敵船に武装はないって話じゃなかったのか?」

「よくわかんないけど、詳しいな。あんた」

「いや、これくらい普通だし。ちっ……にしてもさっきのは火星条約違反だろ」

「さっきの?」

「レーザー」

「ああ、なるほど……。最初の艦長の降伏勧告で蹴りがつければよかったんだが」

「無理だろ、おとなしく降伏してちょっとエッチな姿を見せなさい、とか。独立性E M Iまで用意して何やってんだか」

「うん、無理だな」

カイも頷く。

顔に傷のある男はカイの返答に満足したような表情を浮かべていたが、慌てて窓の外を覗きこんだ。

「ASHが命中した……! いやいよ俺たちの出番だぞ……」

その言葉に、カイはうつむいて唇を噛み、そしてごくつつばを飲み込んだ。そして、誰にも聞こえない小さな声で、

「くそつ。なんでおれは、こんなところにいるんだらう……」

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ホウセンカのワープは減衰器に封じられ、動力も停止している。

さらには電磁妨害によって本国へと通信を取られる心配もなかった。

だが、ワールドビクトリー号の乗組員にとって、これは最初の段階が終了しただけに過ぎない。

これから始まる制圧戦。それこそが本当の戦いなのである。

鉄のひしゃげるような鈍い音に、カイはほとんど緊張を高めていった。その手に持つのは信頼すべきたった一つの武器。

デッキブラシである。

木の柄を両手でつかみ、カイは顔に傷のある男に訊ねた。

「なあ、やっぱりデッキブラシはおかしくないか……？」

カイが手に持っているのはただの掃除用のデッキブラシだ。あいにくビームも出ないしロケットパンチよろしく先っぽが飛んでも行かない。これから戦闘をするのに、心細いことこの上ないのだ。

だが、訊ねられた顔に傷のある男は不思議そうだった。

「どこがおかしいんだ？ まさか女の子たちをビームソードで切り殺すわけにもいかないだろ。それに条約違反だ」

たしかに説明されれば分かるのだが。それでも納得しがたいものがある。カイはうなづいた。できるだけ女の子は傷つけない、それはいい。強力な武器使用は火星条約によって禁じられている、それもいい。

だが、この広い宇宙の片隅、宇宙船の中でモップを持ってばかり殴り合うのは、なんかちがうんじゃないかなーなどと思えてならなかった。

そんなカイの葛藤の中、敵の宇宙船とのドッキング作業が終わる。  
ガダンッ！

緊張と興奮に誰も声を発することができなかったが、乗組員へ向



防いでいた。その少女へ、顔に傷のある男は容赦なくデッキブラシを打ち込む。

手加減する理由がなかった。いくら相手がか弱くても、これは戦闘であり手加減すれば自分を危険にさらすだけだ。

少女がいくら助けを請おうとも、攻撃をやめる気はない。

だが、少女は他にできることがないかのように、

「いやあ、ここ怖いよ……かかか顔に傷あつて、ふえーん……」  
びたり。

手加減する必要はない。だが思わず、顔に傷のある男は攻撃を止めた。

「お前に、わかるか……？」

「え……は、はい？」

「この顔の傷のせいで……女の子に怖がられ続けた俺の気持ちがかかるかと言ってるんだあああつ！！」

「ぐ、ぐ、ごめんなさい！！？」

打つ、打つ、打つ！

なにかにとりつかれたように、力任せに打ちまくる。それら全てを少女がさばいて見せたのはあまりに強運としか言いようがなかったが、それでも最後にはデッキブラシを取り落とす。

ブラシまで失って、少女は怯え震えていた。だが、はっとしたように表情を変えた。少しづつ少女の表情から強張りが消えていく。

そして、色々納得してすべて解決したように喜びの笑みを浮かべ、  
にっこりと言ってきた。

「えっと、あの、つまり………可哀そうな人なんですね？」

「俺を憐れむなああつ！？」

「ふえええええつっ！？」

気迫に押されて少女が腰を抜かす。

床に倒れて後ずさる少女へと、顔に傷のある男は猛烈な怒りのまじりじりにとじり寄った。少女の口から小さく悲鳴が漏れる。

乗り込んできた敵と戦っていた他の女たちも、少女の危機に叫び

声を上げた。

だがもう遅い。

それらを見殺しにして顔に傷のある男は少女に飛びかかろうとして後ろから蹴り飛ばされ、床に転がった。思わぬ衝撃を受けてうめく。そんな顔に傷のある男を即座に取り囲んだのは、彼の仲間たちだった。それぞれ怒りの声を上げながら顔に傷のある男を殴り、蹴る。

「お前は、な、な、なにをしようとしてたんだ!？」

「不必要に女の子に手を上げようなどと……」

「条約違反だぞ!」

「鉄槌を喰らえいっ」

「ちよ、まつ、やめっ、悪かつ、ぐふう……………」

謝り、腕で身体を守っていた顔に傷のある男がぐったりと意識を失う。だが顔に傷のある男の仲間たちは、まだそのことに気付いた様子はなく、

「……………え? え? え?」

飛びかかれそうだった少女も、そして少女の仲間たちも、驚いたように固まりながらその光景を見続けるしかなかった。

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダバダバダッ

あちこちで戦闘の音が響いている。

ブラシで打ち合う音、悲鳴。そして、人間が床に倒れる音。聞いていてもいい気分になれず、かといって戦う気にもなれずに、カイは歩き続けた。

そうしてたどり着いたのは、調理室。

目を疑った。混戦の中、屈強な男たちが次々と倒れ伏していく。しかも、それをなしているのはひときわ小柄な少女だった。両の手にデッキブラシではなく小さな風呂掃除用のバスブラシをそれぞれ構えている。その二刀流と俊敏性を生かし、少女は荒ぶる暴風のように敵を蹴散らしていく。

「情けない男どもめ！ さあ、次のボクの相手は誰だい！？」

響き渡る鋭い声。男たちは恐れおののき、誰も彼女に向かおうとしない。

カイは その少女を知っていた。

「おれが……おれが相手だ……！ 構えろッ、ヒヤツカアッ！！」  
少女が振り向く。

鋭い眼差しがカイを射抜き、それは戸惑いに変じた。

「え……？ カイ、カイだよね！ どうしてこんなところに！？」

「うおおおおおおおっ」

ヒヤツカという言葉には耳をかさず、突進しデッキブラシを打ち込む。未熟な太刀筋。撥ね退けられるかと思いきや、ヒヤツカは困惑して勢いを失い、ただ防戦するだけだった。

激しい衝動に突き動かされ攻撃し続ける。

次の瞬間、身体に痛みを感じた。

蹴られたのだと気付いた時には、ヒヤツカはすでに距離を取っていた。手近にあったまな板を放り投げるも、軽々と避けられる。

「やめてよっ。カイなんだろう！？ どうしてこんな奴らと、こんなところにいるのさっ！？」

「だまれっ！」

ヒヤツカが他の奴らの争いを避けた瞬間、カイは距離を詰めた。打ち込むデッキブラシは、さして重量もなさそうなヒヤツカのブラシに払われ続ける。

「どうしちゃったの……やだよ、ボク……。やめてよおっ」

「うるさいっ、おれは……っ」

ヒヤツカの悲痛な叫び。聞いてはいけない。聞いたら自分は駄目になる。

「ずっと、優しくしてくれたじゃないかっ。小さなころから仲良くして、ボクたちは友達だと思ってたのにな」

「……………っ」

聞くな。聞いてはいけない。

「カイが手伝ってくれたから、ボクは夢をかなえられたんだ！ カイのおかげで、この宇宙で働くことができるのにな」

「そして、地上に置いて行かれたおれはどうしたらいい!?」

「……………!?」

「一度も帰ってもこないで、宇宙に夢中になっ……………！」

「え……………」

「お前に、お前に置いて行かれたおれは……………！ どうしたらいいんだよおっ……………！」

涙があふれる。泣いてはいけない。そう思っても感情を抑えることができなかった。もう、ブラシを振るう力すら入らない。

ヒヤツカの戸惑った声。

「そんな、うそ……………。カイはなにを言っ……………」

そう言っ身体を震わせるヒヤツカの姿すら、涙でぼやけ始める。

「カイがこんなことをしてるのは、全部ボクのせいなの……………？」

「……………」

からんと、音が鳴った。よく見えなかったが、すぐにヒヤツカがブラシを落としたのだと気づく。いつの間にか調理室は静まり返っていた。

「いいよ」

「……………？」

「カイにだったら、なにをされても……………」  
違う。

揺れる視界の中、カイは口には出さずつぶやいた。

本当に望んでいたのはこんなことじゃなかったはずなのに……………。

ただヒヤツカに笑っていて欲しかっただけなのに……。  
自分は、なにをやっているのだろう。  
カイはただ、後悔に打ち震えて呆然と立ち尽くした。

ダツ、ダツ、ダバダバダツ  
ダツ、ダツ、ダバダバダツ  
ダツ、ダツ、ダバダバダツ  
ダツ、ダツ、ダバダバダツ

艦橋。

その奥から野太い悲鳴が聞こえ、男たちが飛び出してきた。閃光が瞬く。艦長は嫌な予感がした。

あれはA T - G H 4 4 3のビームガンではないか？

少女と男たちの声が、無意味に言い争っている。

「そ、そんなもので撃たれたら死んでしまっつ」

「ええ。死になさい」

「さ、最低だ!？」

「最低なのはあなたたちです」

いやまあ、もつともだが。

銃を構えて出てきたのは、年端もいかない少女のように思えた。

だが服装が他の乗組員とは違う。

艦長はつぶやいた。

「あれが船長か……」

可愛らしい少女だった。長い髪を後ろで二つにわけてツォーテールにしている。

光線銃に脅えて後ずさりする男3人組の一人が、みつともなく叫んだ。

「か、火星条約違反だぞ!？」

「知っています」

「条約を違反して、どうなるか分かっているのか!？」

「あ、あなた達に捕らえられるよりはましです」

「それももつともだが。」

艦長は少女の前へと進みでた。男3人組が情けなく後ろに隠れるのは無視して。

「まあ、待ちたまえ」

艦長は少女を説得するつもりだった。艦長は説得に対して、誰にも及びつかないほどの絶対的な自信があった。艦長に説得されない人間などいようはずがない。

戦う必要など、ない。

「心配しなくても、不埒なまねをしようというのではない。私はただ」

そこでいったん言葉を区切り、艦長は冷たい視線を向けてくる少女に言った。

「ちょっとエッチなポーズをとってもらいたいだけだ」

「じゅうぶん不埒じゃないですか!」

即座に言い返され、あれ、なにか説得の仕方間違えたかなあ、などと艦長は首を傾げた。

そんな隙を狙われてビームを打たれるも、すんでのところで避ける。後ろがうるさいが、まあ大丈夫だろう。

乱射される光線。それを避けながら艦長は一気に少女へと詰め寄り、光線銃を弾き飛ばす。

そのまま少女を拘束しようとして、

「やめてください、このへんたいっ」

びくり。艦長は身体を震わせ動きを止めた。

少女自身驚いていたが、おずおずと言ってくる。

「……へ、変態」

「ぐっ」

「この人間の底辺っ」

「うぐっ」

「宇宙のゴミっ！！」

「ぐはあッ……」

容赦ない言葉の連続攻撃に、膝をついて倒れ伏す艦長。

その光景に、周囲の3人がざわめいた。

「艦長がやられた!？」

「……このままじゃ、ほんとにゴミになったりして」

「なあ、もしかして艦長、喜んでるだけじゃないか？」

口々に部下たちが言うが、やはり無視。

立ち上がる！

「まだだ。まだ私はやられるわけにはいかない……っ！」

徒手空拳のまま少女に詰め寄る艦長。

対して少女は懐から小さなブラシを取り出す。

「ど、どうしてそこまでこだわるんですか……。むきになるんですかっ」

「人がエツチなことにかかる想い。それは人それぞれだ……。だが、あえて言おう！ 少女がエツチな出来事に直面して恥じらう表情、

私は そんな姿が大好きだ！」

「う、宇宙の果てで、勝手にやってればいいでしょうっ!？ どうして私が巻き込まれなきゃならないんです……!？」

「決まっている!」

「……………!？」

「それは君が、かわいい美少女だからだ!」

艦長の心からの叫びに、少女が驚いて動きを止めた。

「え、あ、う……?」

顔を赤くして、ぎくしゃくと少女は艦長から距離を取る。その耳まで赤くなつた表情に艦長は心の中でつぶやいた。

(かわいい……)

恥ずかしさに堪えきれなくなったのか、少女が顔を隠すように俯いた。

その俯く姿はまるでさなぎのようだ。そして艦長は確かに見た。  
少女の背から、まばゆく蝶の羽が広がっていくのを。

少女の姿は、宇宙を飛ばたく妖精そのものだった。

その姿を、大勢の人間が見つめていた。艦橋のモニターを通じて、  
少女の恥じらう様子が宇宙船ホウセンカ全体に中継されていた。

もう、争いの声は無い。

少女の可愛らしさに、動きを止め、じっと誰も見入っていた…  
…。

ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ

こうして、女の子のかわいさによってスターシップ・オペレーシ  
ョンによる騒乱は終結を迎えた。

だが決して、人々からエッチな心が消えることは無い。

いつか同志たちは、それぞれの夢のために再び立ち上がることだ  
ろう。

エッチな想いが星の船に満ちるその時まで。

さようなら、同志たちよ！

また会う日まで！

スターシィィィィィップ・オペレーション！！

ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ  
ダッ、ダッ、ダバダバダッ

ダッ、ダッ、ダッ、ダッ、ダッ、  
ダッ、ダッ、ダッ、ダッ、ダッ、  
ダバダバダバダバダバダバダ  
ダバダバダバダバダバダバダ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2783j/>

---

スターシップ オペレーション

2010年10月8日15時13分発行